

全6冊の岩波文庫「太平記」のちょうど半分、3冊目の最終巻にこぎつけました。コロナはまだ、終息の気配もありませんが、無事に読み終えることを願ってやみません。この日の第21巻は、物語の主人公のひとり後醍醐天皇の死去に加え、歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」の下敷きとなった塩冶判官事件もあって、興味津々。しばらくお休みだった横山さんも出席され、うれしい例会でした。

◇輪読した箇所は次の通りです。

(二) 天下時勢粧の事 (三) 神輿動座の事

妙法院焼き討ち

(P409～415)

暦応元年(1338)の秋、紅葉狩り帰りの佐々木道誉一族の下部が妙法院の庭の紅葉の枝を折り、番人に打たれて追い出された。これを聞いた道誉は激怒し、三百余騎で妙法院を襲わせ、院を焼き払った。院は延暦寺三門跡のひとつで、時の院主は後伏見上皇皇子の亮性法親王。山門は道誉以下の処分を求めて強訴したが、幕府に遠慮した朝廷の措置は道誉父子の上総国配流という寛刑。配所に赴く一行は、日吉大社の使いと信じられているサルスの皮の鞆、腰当、鶯の鳥籠を手に、遊女を引き連れ、所々で宴会をしながら、という山門、朝廷を小馬鹿にしたばさら道中。しかも、翌年には帰京して、何食わぬ顔で幕府の仕事を就くというありさまだった。武家がのさばるご時世というわけだ。

(五) 先帝崩御の事 (六) 吉野新帝受禪の事

後醍醐帝逝く

(P418～422)

後醍醐天皇の病が重くなり、延元4年(1339)8月16日、皇子義良親王に皇位を譲って、世を去った。52歳。「玉骨はたとひ南山(吉野)の苔に埋まると雖も、魂魄は常に北闕(京都)の天を望まんと思ふ。もし命を背き、義を軽んぜば、君も継体の君にあらず、臣も忠烈の臣にあらず」という無念の言葉を残した。遺言により、吉野・蔵王堂近くの丘に、北向きに葬られた。伊勢神宮に義良親王の皇位継承を告げる勅使が派遣され、第96代後村上天皇が誕生する。

北畠親房の皇位正統観

「神皇正統記」で親房は後

村上天皇を「天照大神よりこのかた正統を受けましたし」と記述する。この場合の「正統」とは、現在まで父子一系で繋がった皇統を指し、途中で断絶した皇統

は除かれる。正統の天皇は「第〇〇世」と数えられ、即位の順番による「第〇〇代」と区別している。これによると第96代の後村上は第50世の天皇となる。この考えは、中世の知識人には共通しているが、親房の場合は、南朝を正統化する論理として用いているのが特徴。同じ論理で北朝を正統化することも可能だ。

斯波高経加賀へ没落

(P427～431)

義貞討死後、勢いを盛り返した新田勢は、足利方の斯波高経が籠る黒丸城を包囲。勝ち目がないと悟った高経は、再起を期して隣国加賀の富樫城に落ちた。

(八) 塩冶判官惨死の事

塩冶高貞の謀反

(P438～463、一部略)

足利尊氏の執事高師直は、出雲守護塩冶高貞の妻が絶世の美人と聞いて横恋慕した。能書家の吉田兼好に恋文を代筆させるなど、手を尽くしたが靡いてくれない。ついに師直は尊氏、直義に高貞が陰謀を企てていると讒言。妻の言葉で誅伐を覚悟した高貞は、妻と別々に本国への落ち延びを図る。しかし、妻は播磨国蔭山で追いつかれて惨死、高貞は逃げ切ったが、妻の最期を知り、自害して果てた。

※塩冶事件の真相 事件のあった暦応4年(1341)前半期には、越前だけでなく常陸など各地で南朝軍の攻勢が続いた。それに呼応して高貞が謀反した可能性はあり、陰謀を企て逃亡した高貞の追討を求める直義名の軍勢催促状が残っている。また、時の左大臣洞院公賢の日記に、兼好が師直の依頼で年始の衣装に付き相談に来たとあるので、代筆も不自然ではない。

第23巻輪読予定ページ(12月21日)

- 1) 35 去年の九月～38 ありけるにや
- 2) 39 されば～43 待つたりける
- 3) 43 尾張守～46 云ひつべし
- 4) 46 脇屋刑部～48 候へども
- 5) 53 古へより～54 立たれける
- 6) 54 暦応五年～58 多かりけり
- 7) 58 この年の～62 匆ねらる
- 8) 62 その弟に～65 なかりけれ
- 9) 65 吉野には～68 下りける
- 9) 68 元の女房～70 花なるべし

<注>担当特定箇所は、飽浦三郎左衛門信胤の寝返りを語る9)とします。